

# 三井物産の豪州塩田事業 (シャークベイ、オンズロー)



三井物産株式会社  
グローバルアルカリ事業部 塩事業室 室長  
さとう よしのり  
佐藤 嘉記

## 入社から現在の仕事に至るまで

当社への入社は平成8年（1996年）で、最初の配属先は関西支社経理部で化学品を担当しました。入社3年目に本店合繊原料部へ異動し、その後2013年までの約15年間にわたり、アジア特に中国向けの合成繊維（ポリエステル）原料の販売に携わってきました。その間、インドネシアのジャカルタに約5年間、中国の上海に約2年間駐在しました。2013年にはいったん営業から離れ、基礎化学品本部の戦略企画室で本部の経営戦略・事業計画策定を担当し、その後2015年4月より現職に就いています。

## シャークベイの魅力

野生のジュゴンやイルカが生息し、1991年には世界遺産にも登録されるほど、幻想的な豪州の最西端シャークベイ。ここで当社は、環境への負荷がほとんどない天日干しによって塩を作っています。天日塩は、海から取り込んだ海水が蒸発池という幾つかの池を段階的に経ていく中で塩分濃度が濃縮され、最後の結晶池において誕生します。これは1年半から2年ほどの時間を必要とする、まさに自然の営みです。雨がほとんど降らず、サイク

ロンも少ないという利点も活かし、シャークベイ塩田では安定的に塩を生産しています。晴天が多い乾燥した気候が生み出す、外洋より50%も塩分濃度の高い清らかな海水と、太陽と穏やかな風に恵まれたこの場所は、まさに塩田事業を手掛けるための条件がそろった奇跡的な土地といえます。

当社はこの土地と、さらに北へ550kmほどのオンズローという地にそれぞれ広大な塩田を保有しており、その総面積は山手線の内側の面積の2.5倍に相当する広さ（155km<sup>2</sup>）を誇ります。その生産量は年間350万tで、この西豪州の地からアジア全域に供給しています。

## 塩の用途

塩は、食用の他にさまざまにカタチを変えて暮らしの中に溶け込んでいます。日本全体の年間消費量は約800万t（2014年時点）で、あまり知られていませんが、その8割は「工業用」です。塩を電気分解すると「塩素」と「カセイソーダ」になります。例えば「塩素」は、幾つもの工程を経て、合成皮革や塩化ビニルやウレタンの原料になります。さらに数々の加工によって、洋服やバッグ類、部屋の壁紙、



シャークベイ塩田



オンズロー塩田の収穫機

座り心地の良い椅子になって、人々の暮らしを彩っています。その他の塩の用途として、パソコンやスマートフォン、紙、洗剤、ガラス、合成繊維、人工皮革、住宅や建築資材など、本当に驚くほどカタチを変えて身近なところで使われています。

### 三井物産の塩田事業の沿革

当社が塩の生産事業に乗り出したのは、1973年。日本・アジアの塩需要を満たすために豪州のシャークベイ塩田に出資したのが始まりでした。その後2005年にシャークベイの100%子会社化、2006年にオンズロー塩田の事業権益を取得するなど、ビジネス形態を「物流」主体から「事業」へと変化させてきました。天日塩の製造業に進出することでマーケットでの存在感を高め、物流機能も強化しながら、塩田事業の競争力強化および円滑な運営を日々追求しています。

### 三井物産の塩田事業の強み

当社の塩田事業の強みの一つはその品質です。食用として非常に高い品質を誇るシャークベイの塩は、ほんのりと甘く、マイルドで、付加価値の高い食品加工向けに輸出を拡大し

ています。また、オンズロー塩田では生産能力の拡張を通じて工業用塩の生産を強化しており、日本をはじめ極東・東南アジア諸国へ、安定的に原料塩を供給しています。このように、食用、工業用と幅広いお客さまのご要望に応えられる生産体制となっております。

また、もう一つの強みはその立地。シャークベイ、オンズロー両塩田は塩の需要の中心であるアジアに近く、両塩田合わせると、当社はアジア市場でトップクラスの生産能力を誇り、その恵まれた立地条件を活かして、お客さまのさまざまなご要望に応じています。

### 人々の未来へ

当社の塩田事業は、生活水準の向上と人口の増加を背景に需要が増えるアジア各国向けの拡販を展開する準備を進めています。当社の作った塩のファンを増やしつ、品質の高い塩を必要な時に必要な数量を届けられるようにしたいと思っています。

今日も、豪州で採れた塩が、食卓に並び、さまざまな日用品の原材料になり、また水もきれいにしています。「地球の恵みで、暮らしを彩る」。当社の塩田事業は、今日もそつと私たちの暮らしを、支え続けています。 